様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １９ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００４１３

研究課題名（和文）パブリック・インテレクチュアルとしてのエマソン―自然に基づく普遍言語の可能性―

研究課題名（英文）Emerson as a Public Intellectual: Pursuing Possibilities of a Universal Language Founded on Nature

研究代表者
小田　敦子（Oda, Atsuko）

三重大学・人文学部・特任教授（教育担当）

研究者番号：８０１９４５５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：エマソンを「パブリック・インテレクチュアル」とするに力のあった「自己信頼」という考えには、「私人の無限性」の基盤には公的な存在である自然の法、或いは、自然の生成力があるという当時の人々には受容しにくい科学的な、それも進化論的な思考があり、その葛藤がエマソンを難解にしていると考え、Nature(1836)からRepresentative Men(1850)まで科学的言説を検証し、これまで看過されてきた科学的視点の重要性を明らかにした。後者は偉人論ではなく、エマソンの科学的思考がどのように形成されていったか、重要概念である「代表/表象」の科学的根拠や、有機的生命観のゲーテで終わる意味を認めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
アメリカ本国の研究ではあまり論じられないテーマで先行研究も少ないため議論を呼ぶ点もあったが、論文や学会発表を通じて、意味のある視点を提供できたと思う。スコットランド啓蒙主義やイギリス・ロマン派など、エマソンへの影響として周知の事実も科学的な視点から再考することで得た知見は、エマソン以外の研究者にも資することできた。
影響力が大きい割にその影響が認識されることの少ないエマソンの存在の大きさを伝えることに努めた。明治のベストセラー、Self-Helpへのエマソンの影響を論じたのも、日本でも忘れられている、かつてのエマソン人気を知ることには現代の日本にとっても意味があると思うからだった。

研究成果の概要（英文）：On the basis of Emerson's original idea of "self-reliance," which made him the first "public intellectual" in America, the primary source is Nature itself, the creative power which he thinks is shared by every private man and ensures his or her infinitude. Our research examined so-called mystic discourses in Emerson's works ranging from Nature (1836) to Representative Men (1850) and found that he is more a naturalist and practical moralist than a mystic.
Our reading clarifies Representative Men to be a biography of Emerson as a naturalist, showing how Emerson's key word, "representative," which is related to the idea of a "public" from which there are no exclusions, comes from Swedenborg's physiology and how his scientific views had developed from Plato, culminating in Goethe's organic view of life.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：Emerson　Public Intellectual　Nature　Representation　Representative Men　Science　Secularity　Goethe

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

アメリカでは1980年代以降、エマソンを20世紀の哲学や20世紀アメリカ詩人の祖とする研究や、奴隷制など政治･社会問題に対する歴史･文化研究の視点からのものなど、エマソン研究は活況を呈している。ロレンス・ビュエルの *Emerson* (2003)はその動向を見事に総括して、エマソンは「個人主義」などアメリカ的価値を唱道する国民的イコンであるだけでなく、グローバル化の時代を先取りする思想を提示していると特徴づけた。エマソンは当時の「オリエンタリズム」とは一線を画する仕方で、古今東西の思想や文学に関心をもっていた。欧米の都市文明を「自然」という観点から批評したエマソンには、古代の自然法が自然=普遍として目指した普遍言語への探求や自然科学的な観察に基づき「法」の概念を更新する意図があり、人間の「生命」の在り方について、アメリカ文化であり、アメリカ文化にとどまらないより広汎な公共性、大衆性を念頭においた、より現代的な思索者であり表現者であるという特質があるが、そのようなエマソンの「自然」を科学的に考察する側面はこれまでのエマソン研究ではあまり問題にされてこなかった。日本の読者にとってもエマソンは歴史上では明治期のキリスト教の影響の影に消えてしまっており、明治期の日本人にエマソンが与えた影響の大きさも再評価する価値がある。

２．研究の目的

エマソンは19世紀アメリカ文学研究のいわばミッシング･リンク、或いは、ソローやホーソーンに乗り越えられたと否定的に考えられることが多かったので、彼らへの霊感の源であったエマソンの価値を回復することを目的とした。明治期に、幕府の儒者であった中村正直により日本で最初に訳されたエマソンの作品は“Compensation”であったが、このエマソンを代表する観念にしても、その自然の科学的側面が重視されることはなく、古いエマソンの代表作とみなされている。エマソンの自然観を刷新することを視野に入れて研究を行った。

「コンコードの聖人」という評判を生むに至った精神性を喚起する読者との応答の基盤には生涯持続する自然や宇宙大の世界への志向がある。エマソンの自然への志向は詩においてより率直に表現されている。エマソンの詩は英語圏読者には韻律の破調などから二流の詩とみなされ、あまり研究されることもなかったが、詩を読むとエッセイの用語解説にもなるという点を具体的に例証することで、その科学的志向をエッセイの中にも位置づける。

エマソンの詩の魅力と重要性を伝えるとともに、難解と言われるエッセイの表現にエマソンの自然観が表現されていると考えることで、その表現が理解しやすくなることを示す。つまり、これまで隠れていたエッセイが表現する進化論的な自然観やエマソンにとっての科学の意味、異教的世界観にも理を認める東西融合的な思想を明らかにすることで、エマソンの生命観が現代の読者にこそ理解でき共有できるものであることを示し、エマソンが多くの読者に読まれる文学になることに資する。

３．研究の方法

牧師時代の説教を含むエマソンの作品や日記、手紙などテキストを読み、エマソンの科学や自然に関する思考について考え、エマソンの思想的背景となる先行する思想家たち、特に、スコットランド啓蒙主義とドイツ、イギリスのロマン主義者の作品や関連文献を読むことが中心であった。テキストの読みに関しては海外研究協力者、サラ・ワイダー(コルゲート大学教授)、アニタ・パターソン（ボストン大学教授）と通常はＥメールでのやり取りをしながら、年に１度はエマソンの母校であるハーバード大学等での資料収集も兼ねて、研究打合せのためにボストン大学アニタ・パターソン研究室で３人の研究会を行い、大いに考察を深めた。途中、コロナ禍の影響により、研究会の開催形態はオンライン上になったこともあるが、国内外の学会発表や論文などにより成果を随時公開して、批判を仰ぎながら、以下のようなテーマにそって研究の精度を高めていくことができた。

まず、エマソンを“public intellectual”にするのに力のあった“self-reliance”という観念に、エマソンの自然観がどう関わっているかを考えた。エマソンがイコノクラストとみなされていた初期のエッセイから、社会的地位を確率した時期の *The Conduct of Life* (1860)まで変わらない“the infinitude of the private man”への信念とエマソン流の社会を越えて自然の法に基づく Public の概念の表現法の工夫を考えた。次に、エマソンの Public 概念を支える、”representative”という概念における「解放者としての詩人」や自然との関係の意味を、*Nature*（1836）から *Representative Men* (1850)を中心に考えた。アメリカでは受容されにくい進化論的な思考を語るエマソンの曖昧な表現について検証することが重要であり注意を要した。

４．研究成果

エマソンの自然観が必ずしもアメリカ人にとっての常識にそったものでないことをどのように表現するかという観点から、エマソンの「翻訳」について考えるサラ・ワイダーが Emerson Society のパネルとして企画した“Emerson in Translation”（ポー・ホーソーン国際学会）にて詩“Woodnotes II”が描く、皆が使うアメリカ語ではない、翻訳可能な自然の普遍言語を志向

していたことについて発表し、エマソンが西欧語よりも日本語に翻訳しやすい側面など活発な議論を引き出した。

大衆動員型のジャクソン民主主義の時代にエマソンは“non-conformist”であることをよしとし、また、当時の社会改革運動にも批判的であったが、彼自身のやり方で現にある社会とは別の自然に基づき、private と public が両立する世界、「コミュニティ」ではなくよい「隣近所」を構想していたことを、2019 年 5 月ホーソーン協会全国大会のシンポジウム「“Economy, however, is my mottoe”: アンテベラム作家たちの台所事情」（真田満・倉橋洋子、伊藤淑子と）での発表、「エマソン経済圏としてのコンコード」で論じた。このシンポジウムを基に 13 人の執筆者からなる『アメリカ作家たちとエコノミー』が 2023 年 2 月に出版され、上記発表を敷衍した論文でエマソンの同時代作家たちとの多様な関係を紹介するとともに、最初の妻の遺産がエマソンのそのようなキャリアを可能にしたことを、金銭面だけでなく、これまであまり知られていなかった自然志向や詩作との関係においても重要であることを明らかにした。

忘れられがちなエマソンの影響を可視化するために、2019 年 10 月の中部英文学会大会のシンポジウム「エマソンの影響―文学から自己啓発本まで」を企画し、堀内正規氏（ホイットマン）、野田明氏（メルヴィル）、尾崎俊介氏（自己啓発本）を招聘し、「パブリック・インテレクチュアルとしてのエマソン」の題で、エマソンの“Self-Reliance”における一般的な Public 概念の転覆、キリスト教的“spirit”ではなくより自然の生成力を喚起する言葉である“genius”による公共性を語る「詩人」による common-wealth（マサチューセッツ州の「州」を示す言葉でもある）の文化の創造など、nature と culture の新しい結びつきを訴える方法を検証し、精神的な概念とみえるものにも自然への関心が潜在することを示した。

同様の観点から、ソロー学会誌（2019）の書評で大西直樹著『エミリ・ディキンスン―アメジストの記憶』を評した際も、ディキンスンへのエマソンの影響が、ディキンスンの定評ある伝記においても示唆されているにも拘らず、等閑視されていることを指摘した。

エマソンの日本での受容には以前から関心を持っていたが、尾崎氏の現代の自己啓発本に対し、明治のベストセラーとなった自己啓発本、サミュエル・スマイルズの *Self-Help* (1859)はタイトルの類似性もありエマソンの影響を予想していたが、それを実証的に示せたのが、論文「エマソンの”Self-Reliance”とスマイルズの“Self-Help”」(2020)である。ユニテリアンの文化でもある“self-culture”の影響だけでなく、エマソンのエッセイが実際スマイルズによって読まれ、明示されずに引用されていることも発見できた。また、エマソンの翻訳者となった中村正直の慧眼を指摘することができたのも、こちらも福沢諭吉の陰に隠れているので意味があることだと思う。

2020 年度はコロナ禍の影響で、予定していた共同研究者とのシンポジウムは中止になったが、そのために準備していたエマソンの自然詩の追悼詩的性質について、妻ではなく 5 歳の息子の死と関連を指摘したのが、「“May-Day”―エマソンの「パストラル・エレジー」」である。コンコードの自然やウォーキングの描写と、エマソンへの影響が指摘されるワーズワースの旅や自然描写との違いを明らかにした。

エマソンの自然観がイギリス・ロマン派を超え、「存在の鎖」やキリスト教の枠組みを超えて、初期の *Nature* からすでに進化論的であると言えるかどうかについては、共同研究者たちとも議論を継続中であるが、スコットランド啓蒙主義やドイツ・ロマン主義の世俗化と科学的な思考について考えるうちに、エマソンへの影響としてあまり論じられることのなかった、エラズマス・ダーウィンやゲーテのエマソンとの親近性に関心をもつようになった。「エマソンの *Nature* の曖昧性――元論から進化論へ―」（2022）はまず、アメリカ文学会関西支部例会(2021)で発表し、ケネス・バークが曖昧さに注目した部分が、エマソンが 1844 年のエッセイ第二集に収めた“Nature”で明言した“the secularity of nature”（世俗性と長い周期性の掛詞）という進化論的な説明と同じであること、科学と精神とを結びつけるエラズマス・ダーウィンやゲーテへのエマソンの高い評価、リンネの「分類」を「変態」つまり生成力に展開したゲーテの重要性を論じた。その場でのエマソンの“natural history”を「自然史」と捉えることや、人間以前以後の歴史の捉え方などへの質問にも答える形で、同題の論文にまとめた。

壮大なヨーロッパの知的伝統に立つエマソンの思想的背景を捉える一つの方法として、*Representative Men* がエマソンの知的成長の記録として読めることに気づいた。プラトン、スウェーデンボルグはエマソンへの影響源として絶えず言及されるが、その意味を科学の発展としてとらえる見方はあまりないが、エマソンはそのように捉えていることが重要だと考え、最終章はゲーテに至る科学的思考と人間精神とのつながりの系譜が示されていることを論じた。プラトン以来のミクロコズムとマクロコズムの対応を例に、エマソンが先人たちの思考を現代科学の視点から更新したことを、「エマソンのスウェーデンボルグ評：*Representative Men* と“Initial, Daemonic, and Celestial Love”」(2023)や口頭発表“Goethe as a Representative Man”（2023）では論じた。前者は、「一粒の砂に世界を見る」と言った W. ブレイクの詩文集 *The Marriage of Heaven and Hell* (1790-93)が Swedenborg を批判したことにヒントを得て、エマソンの難解な詩、“Initial, Daemonic, and Celestial Love”の題がスウェーデン

ボルグの提示した三段階のパステイーシュであり、エマソンがゲーテから学んだ有機的で生成的な自然観によってスウェーデンボルグを乗り越える過程を描いていることを論証した。後者はアメリカ人共同研究者との研究成果発表として開催した参加者 8 人のワークショップで、ゲーテの科学者として、エマソンの目指した自然の法に基づく時代の新しい聖書の「書き手」として、エマソンの直接の先達であることを論じた。アニタ・パターソンは「代表」という考えを黒人作家たちについて考えてきたが、エマソンと同時代のフレデリック・ダグラスの当時の「科学的人種主義」批判を中心に、サラ・ワイダー（原稿代読）はエマソンの家族や友人たちの間でのゲーテへの関心について発表した。活発な質疑を得て、バターソンの黒人問題の視点からのエマソン研究といわば審美的な研究との合流の道筋がはっきりしてくる、エマソンの公共性と普遍性の感覚に近づくワークショップになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 小田敦子	４．巻 8
２．論文標題 エマソンのスウェーデンボルグ評：Representative Menと “ Initial, Daemonic, and Celestial Love ”	５．発行年 2023年
３．雑誌名 三重大学全学共通教育センター研究紀要	６．最初と最後の頁 15-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小田敦子	４．巻 7
２．論文標題 エマソンのNatureの曖昧性ー一元論から進化論へー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 三重大学教養教育院研究紀要	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小田敦子	４．巻 52
２．論文標題 ” May-Day ” ーエマソンの「パストラル・エレジー」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Pilologa	６．最初と最後の頁 11-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小田敦子	４．巻 51
２．論文標題 エマソンの ” Self-Reliance ” とスマイルズの “ Self-Help ”	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Philologia	６．最初と最後の頁 25-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小田敦子	４．巻 -
２．論文標題 パブリック・インテレクチュアルとしてのエマソン	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本英文学会中部支部HP　http://www.elsj.org/chubu/2019%20proceedings/oda_atsuko.pdf	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 小田敦子
２．発表標題 Goethe as a Representative Man
３．学会等名 科研成果発表 “Workshop on Emerson’s Representative Men”
４．発表年 2023年

１．発表者名 小田敦子
２．発表標題 エマソンのNatureの曖昧性ー一元論から進化論へー
３．学会等名 日本アメリカ文学会関西支部例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 小田敦子
２．発表標題 エマソン経済圏としてのコンコード
３．学会等名 日本ナサニエル・ホーソーン協会
４．発表年 2019年

１．発表者名 小田敦子
２．発表標題 パブリック・インテレクチュアルとしてのエマソン
３．学会等名 日本英文学会中部支部
４．発表年 2019年

１．発表者名 小田敦子
２．発表標題 Emerosn in Translation
３．学会等名 International Poe and Hawthorne conference（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 真田満、倉橋洋子、小田敦子、伊藤淑子（共編著）	４．発行年 2023年
２．出版社 彩流社	５．総ページ数 282
３．書名 19世紀アメリカ作家たちとエコノミー―国家・家庭・親密な圏域	

〔産業財産権〕

〔その他〕

パブリック・インテレクチュアルとしてのエマソン http://www.elsj.org/chubu/2019%20proceedings/oda_atsuko.pdf

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ワイダー　サラ (Wider Sarah)		
研究協力者	パターソン　アニタ (Patterson Anita)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 サラ・アン・ワイダー先生講演会	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 研究成果発表“Workshop on Emerson’s Representative Men”	開催年 2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	コルゲート大学	ボストン大学		